

# あじさい



第 103 号

2020 年 3 月  
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>

# カムチャツカ半島西岸の重要湿地とミヤコドリの標識



Dmitry Dorofeev

ロシア天然資源環境省 全ロシア環境保護研究所 上級研究員  
ドミトリー・ドロフィーエフ Dmitry Dorofeev Дмитрий Дорощеев

## はじめに

オホーツク海北方のシギ・チドリの中継地はこれまでほとんど研究されていなかった。カムチャツカ半島西岸に沿ってのデータを集め、これら中継地を調べることができればいくつかの重要な中継地を明らかにすることができるであろう。これまでに、4つの中継地が知られている。ソボレヴォ町近く<の海岸線>、モロシエチナヤ川河口 (Gerasimov & Gerasimov 2000)、ハイリユーソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口 (Dorofeev & Kazansky 2013)、それにペンジナ・タロフカ両川河口 (Gerasimov 2005) である<5 ページの地図参照>。

## 河口での調査

我々はハイリユーソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口のシギ・チドリ中継地の調査を2015年から始めた。この調査は2010年から2012年まで行ったシロイルカの調査時のデータに基づいていた (Dorofeev & Kazansky 2013)。シロイルカの調査時

に、我々はこの中継地のシギ・チドリの種類や個体数を記録しただけであった。しかし、後にこれまでの文献を見てみると、ここはオホーツク海地方での最大の中継地のひとつで、カムチャツカ西岸で最大のものであることがわかった。

ハイリユーソヴァ川の右岸にはウスチ・ハイリユーソヴァ開拓集落があり、<ペトロパブロフスク・カムチャツキーの>エリゾヴォ空港から飛行機あるいはヘリコプターの便がある。この両川河口では干満の差が激しく、5.5 m ないし 6 m にもなり、これによって広大な干潟ができ、多くの種類のシギ・チドリが南へ渡る際に採餌する。この中継地は6月末から10月始めまで使われる。これまでの最大個体数は28,000羽であり、実に32種を数えた。この中にはSurfbird (*Calidris virgata*)<南北アメリカに生息するシギ=キョウジョシギの近縁種>のユーラシア大陸での初記録もあった (Wader Study, 論文印刷中)。個体数が最も多くなるのは7月初旬であった。

## 目次

カムチャツカ半島西岸の重要湿地と ミヤコドリの標識	2
表紙の言葉	2
鈴鹿の野鳥たちその後	7
ホームページで記録データの閲覧が できるようになりました	8
過去の探鳥会データから分かること	8
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	10
— 連載第19回 キリアイ、ヘラシギ —	
新型コロナウイルス感染症拡大に伴う、 探鳥会中止のお知らせ	14
事務局だより	14
海辺の町のツバメたち	15
野鳥記録 (2019年10月～2020年01月)	16
理事会報告	20
探鳥会報告 (2019年10月～2020年1月)	20
編集後記	24

## 表紙の言葉

### コムクドリ

名張市 田中 豊成

名張でのコムクドリの飛来は、ほぼ毎年若葉が芽吹き始める4月上旬から下旬に見られることが多いです。10羽以下の小群で、休息や栄養補充を兼ねて約3・4日程度滞在してから、北の地方へ移動するようです。雄の頭部や胸は、淡いクリーム色で頬には赤褐色の斑が印象的で、なんだかホッとした親しみを感じます。

秋の南下時期には、見過ごしているのでしょうか、名張で見かけたことは記憶にありません。他の夏鳥と同様に、春や秋の移動をくりかすことは大変でしょう。この春も、コムクドリの群れを見られることを、楽しみにしています。

最も個体数の多いのはオバシギ (*Calidris tenuirostris*)、オオソリハシシギ (*Limosa lapponica*)、オグロシギ (*Limosa limosa*)、ハマシギ (*Calidris alpina*)、トウネン (*Calidris ruficollis*) であった。また、ここハイリュソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口はロシアのレッドデータブックに記載されているハウロクシギ (*Numenius madagascariensis*)、ミヤコドリ (*Haematopus ostralegus*)、ヘラシギ (*Calidris pygmaea*) が訪れる重要な場所である。



ハイリュソヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口上空のシギ・チドリ大群

### 標識調査

2016年から我々は標識調査を始めた。最初はオバシギの捕獲を試みた。しかし、カスミ網ではオバシギを捕まえることは不可能なことがわかった。そこで、我々は特殊なトラップを作った。これは無双網を改良したものである (Dorofeev et al. 2019)。この改良無双網を使って合計 948 羽のオバシギ、コオバシギを標識することができた。我々の調査地では黒と黄色のフラッグを左のスネに付けた。黒は無地で、黄色は番号を刻印したフラッグとした。オバシギについては 2016 年と 2017 年に日本から 4 例の観察が報告された。

### ミヤコドリの繁殖と標識

我々が調査地に到着し、キャンプサイトを作ると、そこでは毎年、2,3 つがいのミヤコドリが警戒していた。2016 年にはキャンプサイトから 800 メートルほど離れた、小石の砂州に巣を見つけた。7 月 14 日、巣には 3 個の卵があった。同じ日に成鳥の半分くらいの大きさのヒナも見つけた。これは非常に遅い繁殖例で、多分 2 回目の産卵であろう。残念ながら、数日後、この巣はクロトウゾクカモメの餌食になってしまった。



改良無双網によるオバシギの捕獲





河口のオバシギの群、黄色のフラッグがみえる

毎夏、ミヤコドリの個体数をしらべたが、最大でも10-15羽であった。キャンプの近くには3ないし5つがいの巣があった。親鳥がしきりに警戒するが、ヒナを見ることはできなかった。この鳥は非常に注意深く、遠く離れていても警戒する。2019年にはイギリスからボランティアの協力員、エドワード・スタビングス (Edward Stubbings) 氏が来訪し、大きな若鳥の捕獲法を教えてくれた。遂に2019年7月15日、2巣で3羽のヒナを捕獲した。我々は数字を刻印したハウロクシギ用フラッグを持っていた。BTOの標識指針ではこの大きさのものがミヤコドリに使えるとされている。このヒナはかなり大きく、標準の金属リングと黒、黄色のフラッグを付けた。これは極東ロシアでミヤコドリにフラッグを付けた初めての例になった。



フラッグの装着作業

その後の野外調査中に、我々はこのフラッグのついた鳥を何回か見た。ヒナの1羽T4はいなくなってしまった。多分この鳥はクロトウゾクカモメ、アカギツネ、あるいはカモメ類に捕食されたのであろう。しかし、残りの2羽、T6とT7についてはその後大きくなり飛べるようになったのを見た。最後にこの2羽を見たのは2019年8月5日であり、十分に成長し、飛べるようになっていた。そして、我々も8月15日に野外調査を終え、この地を離れた。

ハイリュースヴァ・ベロゴロヴァヤ川河口は面積約50平方キロメートルと広大で、かつ餌となる無脊椎動物が豊富な泥質干潟であり、渡ってくるシギ・チドリ類にとって非常に重要な場所である。オバシギとオグロシギは多く、それらは小さな二枚貝 (*Macoma balthica*) <バルトハマグリあるいはその近縁種> を食べている。この二枚貝はまた、ミヤコドリの主な餌となっている。我々もミヤコドリが干潟でこの二枚貝を捕まえているのを見ている。



ベロゴロヴァヤ川河口・ミヤコドリの繁殖地

我々が見たつがいのすべてはベロゴロヴァヤ川河口左岸と Ambon 岬との間の海岸線で生息していた。この場所は人里から離れ、地元の人たちも河口のこの部分には行かないので、ミヤコドリが繁殖できる。ウスチ・ハイリュースヴァ町近くの海岸線でも繁殖に適しているようだが、ここには砂浜となり町まで自動車道路がある。また、たくさんの野犬がいて、ヒナを捕食するので、ミヤコドリにとって繁殖できる場所ではない。

2019年には初めてのヒナを7月7日に見た。また飛べるようになった幼鳥は7月31日に見ているので、この年の繁殖は平年並みであったと思われる。



ミヤコドリの幼鳥

## 日本からの知らせ

我々は東アジアーオーストラリア飛行ルートのどこかで我々がフラッグを付けた鳥が見つかってくれればと願った。しかし、我々はたった3羽だけにフラッグを付けたので、その可能性は極めて低いと思った。なので、我々の若いミヤコドリのうち2羽が秋に日本で見つかったとの知らせを聞いて、たいそう感動した。見つけてくれた人、その情報を我々に伝えてくれた人々に深く感謝する。カムチャツカからのミヤコドリが日本で越冬すると証明した初めての事例である。我々はミヤコドリの越冬地がより南であると考えているので、日本で秋にこのように多くの観察事例が出るとは思っていませんでした。



フラッグを装着したミヤコドリ幼鳥 (T7)

2019/7/15

三重県五主河岸で見つかった  
ミヤコドリ YouTube 動画  
フラッグ (T7) 付き ミヤコドリ



ハイリュースヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口の南約 40 km にカムチャツカ西岸では有名な中継地モロシェチナヤ川河口がある<上記の地図参照>。文献に記載されたデータでは最も重要な中継地の一つであるとされている (Gerasimov & Gerasimov 2000, Schuckard et al. 2006)。しかし、この河口はハイリュースヴァ川よりも狭く (14 平方キロメートル)、重要性は低いように思われた (Dorofeev & Kazansky 2013)。しかし、2011 年に我々はそこで 200 羽ものミヤコドリの大群を見ている。そのほとんどが、繁殖に加わっていない鳥であった。2018 年には 50 羽ほ

どしか見られなかったが、繁殖つがい数が数つがい見られた。なぜ、繁殖に加わっていないミヤコドリがモロシェチナヤ河口を好んでハイリュースヴァ・ベロゴロヴァヤ両川河口に来ないのか、我々には解決

表 フラッグの付いたミヤコドリの目撃情報

個体	日付	目撃地	撮影者	情報源
T6	2019年 9月 25日	千葉県三番瀬干潟	田久保 晴孝	環境省発表
	2019年 10月 27日	同上		環境省発表
	2019年 10月 30日	同上		環境省発表
	2019年 11月 13日	同上	伊東 紘	環境省発表
	2020年 2月 2日	同上	田久保 晴孝	日本野鳥の会東京
T7	2019年 9月 27日	三重県安濃川河口	Katsuta K.	環境省発表
	2019年 9月 28日	三重県雲出川河口		環境省発表
	2019年 10月 1日	三重県五主海岸	笹間 俊秋	日本野鳥の会三重
	2019年 10月 16日	三重県雲出川河口	片山 賢一	環境省発表
	2019年 11月 16日	三重県高松海岸	鈴木 健真	日本野鳥の会三重



QRコード



河口調査地のキャンプサイト

のできない疑問である。

著者は標識されたミヤコドリを観察してくれた人に感謝する。我々は黒と黄色のフラッグをオバシギ、コオバシギ、オオソリハシシギ、オグロシギ、ハマシギ、メダイチドリに付けている。2020年も我々はカムチャツカ半島西岸で最大のシギ・チドリ類中継地で野外調査を続ける計画をしている。もちろん、ミヤコドリにもフラッグを付けようと思っている。来秋の日本からの便りを期待しながら。

(次号へ続く) (訳 平井正志)

### 訳者あとがき

ミヤコドリにフラッグを付けたロシアのドロフィーエフ氏と連絡が取れ、興味深いレポートを送っていただき、訳した。読みやすいように意識した部分もあった。豊富な内容で、写真も多いため、一部を次号に送り、掲載する。原文はホー



繁殖地を飛翔するミヤコドリ

ムページ (<https://miebird.org/index.php/ja/16-announce/753-oystercatcher-flag2019> 「フラッグ付きのミヤコドリはカムチャツカから」) に掲載する予定であるので、興味ある方はお読みください。なお文中の <> 内は訳者のコメント。著者と連絡を取るについて山階鳥類研究所、千田万里子氏に協力していただいた。ここに謝意を表す。

### (参考文献)

Dorofeev, D., A. Matsyna, A. Ivanov & E. Khudyakova. 2019. A modified pull-net for catching Great Knot at roost sites. *Wader Study* 126: 154–156.

Dorofeev, D.S. & F.V. Kazansky. 2013. Post-breeding stopover sites of waders in the estuaries of the Khairusovo, Belogolovaya and Moroshechnaya western Kamchatka Peninsula, Russia, 2010–2012. *Wader Study Group Bulletin* 120: 119–123.

Gerasimov, Y. 2005. The Penzhina River estuary, Kamchatka, Russia—a very important shorebird site during southward migration. *Status and conservation of shorebirds in the East Asian-Australasian Flyway. Wetlands International Global Series* 18: 161–167.

Gerasimov, Y. & N. Gerasimov. 2000. The importance of the Moroshechnaya river estuary as a staging site for shorebirds. *Stilt* 36: 20–25.

Schuckard, R., F. Huettmann, K. Gosbell, J. Geale, S. Kendall, Y. Gerasimov, E. Matsina & W. Geeves. 2006. Shorebird and gull census at Moroshechnaya estuary, Kamchatka, far east Russia, during August 2004. *Stilt*: 34.